

『葵上』における死霊のイメージ

—— 火車に乗った六条御息所 ——

西 村 聡

一、生霊死霊の間

能『葵上』のシテは六条御息所——その死霊ではなく、生霊とされている（『謡曲大観』・日本古典文学大系『謡曲集上』など）。

御息所が生存中の葵巻に本説を求め、彼女が夢中に病床の葵上を襲って、「とかく引きまざる」「うちかなぐる」などした「いかきひたぶる」なるまいを、「うはなり打ち」として舞台化し、前半の見せ所に配した能のつくりからみて、それは疑う余地のない了解であろう。

しかし、登場人物の誰ひとりとして、シテを「生霊」と呼ぶことがないのもまた事実である。だからといってただちに、シテは生霊にあらずと決めつけることはもちろんできないが、シテ自身が「これは六条御息所の怨霊なり」と名のっていることに注意したい。「怨霊」は、「死^シテモ生^イテモ、人ニツクモ有」（『謡抄』）り、生死両義あるうち、一般には、たとえば『日葡辞書』に「この世に現れる亡霊、または、生前に何かの恨みや憎しみの念を抱いていた相手に災いを加える亡霊」（『邦訳日葡辞書』）とあるように、むしろ「亡霊」の意で使われることの多い語であることは確認しておく必要があるだろう。

『源氏物語』では、源氏が行われた「御修法」により、亡くなった乳母の霊や家筋に祟るもののけなど「多く出で来」たなかに、葵上の枕辺

を片時も離れない「もの」がひとつについて、左大臣家の女房たちはこれを源氏の「御かよひ所」の生霊とにらみ、六条御息所か二条の君（紫上）あたりかと噂している。ワキツレ（朱雀院に仕える臣下³）が照日の巫を招請して「生霊死霊の間（車屋本は「さかひ」）を梓に掛けようというのは、そのような「御かよひ所」の生霊であるのか、あるいは家に憑いた死霊なのか、その別を知ったうえで対策を講ずるつもりなのである。そして、「大方は推量申して候」の言は、梓弓に引かれて「照日の巫女の巫術的霊覚⁴」に見えた「幻影」の「上臈」姿を報告されてはじめて発せられたのであり、「生霊死霊の間を梓に掛け申さばやと存じ候」と述べた時点では、六条御息所のもののけひとつの生死が問題になっているわけではけしていないのだが、以下に論証するとき、生霊とも死霊ともつかないシテの登場をはからずも予言する言葉として、ワキツレの開口は示唆的である。

この、シテの生死のあいまいさについては、はやく池田弥三郎に次のような言及がある。

実をいうと、今日の能の観客は『源氏』に対する知識を有している
ので、葵の上を苦しめるのは六条御息所の生霊と決めているのだが、
これも、能の作者がそう適確に承知していたかどうかはあやしい。

シテは「これは六条御息所の怨霊なり」と名告り、「われ世にあり
しいにしへは」と語る。世にありしは、生きていた時とも、羽振り

のよかつた時ともとれるから、どっちとも決められないが、最後は「成仏得脱の身となり行くぞ有難き」となっているのだ、これはどうも御息所がこの世の人ではなくなっている。つまり能作者は脚色にあたって、能の型通りの段取りの中に、物語に筋を借り、人名を借りて再成していることになる。

シテを生霊と見る現代の注釈書では、「世にありし」を、池田のいう「羽振りのよかつた時」の方に解している。『源氏物語』に即していえば、「故宮のいとやむごとなくおぼしめかしたまひし」頃、御息所が皇太子妃であつた十六歳から二十歳までにあたり、二十九歳の生霊事件をさかのぼること九十三年にすぎず、「いにしへ」というほど遠い過去ではない。しかし、「雲上」の棠花は故宮の死によつてついで、その決定的な喪失感がシテをしてこの語を使わしめたとも考えられ、「せめて今はまた、初めの老ぞ恋しき」と慨嘆した「百年の姥」（『関寺小町』）の、「初めの老」にさえ達していない御息所ではあつても、われ世にありしいにしへは、雲上の花の宴、春の朝の御遊に馴れ、仙洞のもみちの秋の夜は、月に戯れ色香に染み、花やかなりし身なれども、衰へぬれば朝顔の、日影待つ間の有り様なり。

と過去と現在を対比することで「花やか」と「衰へ」のそれぞれをきわだたせ、「夢にだに返らぬものを」の自覚を導く述懐は、小町物の老主人公をほうふつさせる。と同時に、シテの意識上の（絶望的な）時間的距離感、たとえば『関寺小町』がそうであつたように、現在能に仕立てられていながら、シテを亡霊と錯覚する。

このほか、「葉末の露と消えもせは」の仮定に制約されるものの、「われはは蓬生の、もとあらざりし身となりて」が、「（葵上は）生きてこの世にましますば」の「生きて」と対置されることで死を連想させるのと、「火宅の門をや出でぬらん」のシテ謡を『野宮』では御息所の亡霊

が謡うこと、「読誦の声を聞く時は」以下、キリの地謡にはば同文を持つ『通盛』のシテがやはり亡霊であること、等々数え挙げてみると、『葵上』のシテにつきまとう死の翳は消しがたく思われる。

ただし、シテが生霊と死霊のいずれの性格をも併せ持っているからといって、能作者の「『源氏』に対する知識」を「あやし」む必要はあるまい。葵巻を読む人の誰であれ、「葵の上を苦しめるのは六条御息所の生霊」であることくらい、「適確に承知」しているはずである。「承知」のうえで、「生霊」ではなく「怨霊」の語が使われているとすれば、「能の型通りの段取りの中に」本説を押し込んで生じた分裂としてかたづける前に、生霊に死霊を重ねた能作の必然を検証すべきであろう。

二、火車来迎

梓弓に引かれ、へ泥眼への「寄り人」が、「芦毛の駒」ならぬ「破れ車」に乗って登場する。「作曲・型付を担当した」とされる近江猿楽の犬王は、実際に「車に乗」って出たという（『申楽談儀』）。

シテ「三つの車に法の道、火宅の門をや出でぬらん。夕顔の宿の破れ車、遺るかたなきこそ悲しけれ。」

源氏の晴れ姿を一目見んと「忍びて出で」た賀茂の御楔の日、「ひとだまひの奥におしやられ」、「棚などもみな押し折られて」、葵上方との「車の所あらそひ」に敗れた事件は、葵巻における生霊発動の誘因となった。その「遺るかたなき」憤懣と恥辱の思い出を形象するのに、「破れ車」は有効なものはないだろう。「うはなり打ち」の復讐への展開が十分計算された演出といえる。

この車はまた、「火宅の門」を出る「三つの車」に対する「破れ車」であることにおいて、それが『法華経』譬喩品に説かれる「火宅の出車」

（この語は謡曲『車僧』による）の機能を果たせない、つまりそれに乗る怨霊の、いつまでも生死の苦界を離れ得ず、迷いから解脱できない現在をも象徵するのではないか。そうした迷いを、シテはいかに御息所らしく、醒めた眼で、「きのふの花はけふの夢と、驚かぬこそ愚かなれ、あるいは「沙婆電光の境には、恨むべき人もなく、悲しむべき身もあらざるに」などと、知的に、内省的に眺めている。「これまで現れ出でた」のも、「憂きを語り」、「忘れもやらぬが思ひ」を「暫し慰む」ためであつたというのだから、独白のかきりでは、他者（葵上）へ向かう感情を認めたい。

ところが、ワキツレたちに正体を明かし、彼女にとつてのあるべき正体であつた「雲上」の栄花への懐旧が、ひるがえて屈辱の今を痛撃すると、静かに内向していた感情がにわかに反転して、葵上（舞台上の小袖）を見すえながら「恨み」が出現の動機として表明しなおされ（二度目の「これまで現れ出でたるなり」）、シテ謡最後の「なり」を地謡が担当するのを合図に、怨恨の情が堰を切ったようにふき出して、「うはなり打ち」へと爆発する。

「うはなり打ち」とは前妻が後妻を打ち握えること。源氏と葵上が結婚した時、皇太子妃であつた御息所との関係はいまだ生じておらず、前後をいうなら打たれる葵上こそ前妻であるが、葵上による「うはなり打ち」は「車の所あらそひ」で果たされており、そのまま「虐げられる哀れなうはなり」の役柄に終わる」には、御息所は「あまりにも誇り高く、鋭敏な自意識の持ち主であつたため」か、刺激された「御いとみ心」が、「われ人（葵上）のため辛ければ、必ず身（葵上）にも報ふなり」と、正妻への報復に向かうのである。

しかし、どんなに激しく打ちすえたところで、しょせん一時の気晴らしにすぎず、「生きてこの世」にあるかぎり、「光る君」と契れるのが

正妻の地位なら、「夢にだに返らぬ」「わが契り」を嘆き続けるのは「忍び所」の宿命であり、この構図を根底からくつがえすには、葵上をなきものにし、自らがその座につく以外に手だてはない。と、ここまでは生霊の発想にちがいないが、かくなるうえはと、葵上を「破れ車」に乗せ、同車して冥府に連れ去ろうとする御息所の姿には、死の世界に棲む羅刹女のごときイメージが揺曳している。

たとえば、『謡抄』は、「シンイノホムラハミコガス」の注に、「恵心云」として『往生要集』巻上に説く衆合地獄の記述から、刀葉の林にあつて罪人の欲情をあまり、その身を切り割く「端正嚴飾の婦女」による「自業自得」の呵嘖を紹介しているが、同じ『往生要集』が引用する『観仏三昧経』には、「命終」の際、「金車」に座して罪人を地獄へ誘う「玉女」のあることが、次のように説かれていた。

仏、阿難に告げたまはく、「もし衆生ありて、父を殺し、母を殺し、六親を罵辱せん。この罪を作りし者は、命終の時、銅の狗口を張りて十八の車に化す。状、金車の如し。宝蓋、上にありて、一切の火焰、化して玉女となる。罪人、遙かに見て心に歓喜を生じ、「我中に往かんと欲す」と。風刀の解くる時、寒さ急しくして、声を失し、むしろ好き火を得て、車の上にありて、坐して燃ゆる火に自ら爆らんと。この念を作し已りて即便ち命終る。揮擲の間に、已に金車に坐す。玉女を顧り瞻れば、皆鉄の斧を捉りて、その身を折り截る」と。

『地獄草紙』に描かれた「猛火熾燃なる鉄車」は、牛頭・馬頭の阿防羅刹が引き、墮獄後の罪人を責める道具に使われており（このような地獄を「火車地獄」という）、その一方で、平清盛の北の方の夢に現れた火車のように（『平家物語』巻第六、入道死去）、命終の罪人を死に至らせ、「閻魔の庁」に運ぶスペース・シャトルでもあったわけで、時に

魔が女人と変じて来迎したのである。

燃出る瞋恚のはむら消えやらで我と引けん火の車かな¹⁵

〔鈴木正三『盲杖』へ元和五年成〕

「今の恨みはありし報ひ、瞋恚の炎は身を焦がす」と諷い、葵上を打ちする御息所の場合は、「破れ車」に乗って墮いかかる、葵上にのつての地獄の使者（金車の玉女）であるとともに、自らの業火に身を焼かれる罪人でもある。「破れ車」は「火宅の出車」たりえなかつたばかりか、「汝が罪汝ヲ責ム」（『太平記』巻第二十、結城入道墮地獄事）といわれる地獄で、「我と引く」火の車」でさえあった。シテが「生霊」ではなく「怨霊」を名のすることで、そうした読みが可能になってくるのである。

三、悪霊成仏

火車に乗る怨霊に地獄へ拉致されようとする葵上を救うべく、横川の小聖が請ぜられ、懸命に祈る行者の前に、へ般若〱面の「悪霊」と化した御息所が再び姿を現す。祈祷により、悪霊の前に立ちはたかるのは不動明王で、『黒塚』『道成寺』も含めて、へ般若〱面の霊鬼との対決にはきまつて火消しを要請されている。この不動明王と火車との関係について、『宝物集』巻四（最明寺本）に次のような興味深い記述が見られる。

大聖不動明王ハ、悪業煩惱の怨敵をふせがんために、かうまの相を現じ給。左手ニハさくをにぎる、春の柳みわがね、右のたぶさには剣をもてり、秋の霜三尺、後には火焰さかりなり、火じやう三昧なり、前ニハ降伏のすがたをあらはす、魔界をしたがへむがためなり。たのもしきかなや、阿防羅刹のかたき、火の車をぐしてからめ

とらむとせんとき、大聖明王、智恵の剣¹⁶ふりてふせぎ給はむことを。はやく明王ニおもひをかけて、淨刹ニおくられたてまつるべきなり。現世の利¹⁷ても、たのもしくぞ待める。少々申侍べし。

すなわち、不動明王が立ちふさがり、その摩手から人間を守ってくれる相手のひとつに、「火の車をぐし」た「阿防羅刹のかたき」が想定されているのである。「破れ車」に葵上をからめ取って連れ去ろうとした御息所の怨霊には、不動明王に阻止される、火車を具した「怨敵」のイメージが、やはり重ねられているとみてよいのではないか。

数珠を押し揉み、五大尊明王に祈る小聖と、「帰らで不覚し給ふなよ」と不敵な台詞を吐くシテとのたたかいは、他方、『源氏物語』若菜下巻における、紫上の蘇生を期す「すぐれたる験者ども」の祈祷を想起させる。そこでも、「頭よりまことに黒煙を立てて」加持する修験者たちがするのとは不動尊、調ぜられるのは六条御息所の死霊であった。紫上に悪い死霊は、死後すでに十八年を経て、「いにしへの心」の冷めるとまなく、成仏できずに「天翔¹⁸」っている。そう告白する時の死霊には、多屋頼俊の指摘のとおり、御息所の「人間的」な面が戻ってきている。しかし、もののけの活動時には「全くの悪魔」的相貌を呈しており、柏木巻で女三宮に取り憑き、出家させた直後に現れて、「かうぞあるよ」と快哉を叫び、ほくそ笑んだ「いとあさまし」い場面など、その最たる例であろう。『葵上』の「悪霊」「悪鬼」の造型には、『源氏物語』のこうした「悪魔」的死霊像が、影を投じているものと思われる。

その悪霊が、祈り伏せられ、退散するのは、へ般若〱対不動明王のキリの常とはいえ、急転してへ般若〱のまま「成仏得脱の身となり」えたとは、いかにも唐突、意外の感が強い。『黒塚』『道成寺』にそのような終わり方はしていないし、鈴虫巻でも秋好中宮と源氏が、煙にまどい、炎にあぶられる地獄の御息所を想像し、供養を営んでいるが、成仏した

とはついにしるされない。ただ、墮地獄の現在はいくまで中宮の推量（「らむ」）にすぎず、柏木巻で「今は帰るなむ」と笑って去った後は再び出現した形跡はなく、死霊が女三宮の出家を見とどけて「かうぞあるよ」と胸を晴らした時点で、源氏の主だった女君たちへの攻撃、すなわち源氏への復讐はひととおり完了し、そこに「完全な魔霊と化し得て、ついに最終的に帰るべき世界へ帰り行く事のできる解放感」を読みとることは可能だろう。「この後またも来たるまじ」は敗北宣言だが、力の限り不動明王とたたかったへ般若のシテにも同様の「やすらぎや」充実感²⁰がうかがえはする。しかし、復讐は未遂のうちに阻止されたのである。憎悪がつのるのがふつうではないか。

「悪鬼心を和らげ」たのは、「誦詠の声」、つまり「般若声」を聞いたからである。「般若」の語には、悪鬼が畏れる「般若声」（智慧の声、御仏の声）と鬼面のへ般若へと相反する両義あり、またへ般若へ面目体が、「怒りと憎しみ」が外に向かう「凄まじい形相」と、それとは逆に内にこもる「苦悩と憂愁の色」と、互いに矛盾した表情を共在させ、その「内証の自閉的な意識の存在を直観させる悲しさや暗さ」こそは、「復讐をとげるにはむかない幾重にも屈折しやすさ」御息所の内面をうつし出し、そうした、『道成寺』の恋に狂った田舎娘や『黒塚』の人喰い妻が持ちえなかった理性が、「般若声」に感応したと考えられる。その際葵上を奪い、自らを責めもした火の車から、いかにして逃れることができたのであろう。

命終の時、火車が来迎するのは、必ずしも清盛のような大罪を犯した人ばかりでなく、たとえば栗師寺の洛源僧都の場合は、寺の米を五斗ほど借りて返していないことを鬼にとがめられ（『今昔物語集』卷第十五第四、『宇治拾遺物語』卷第四、『発心集』卷第四に紹介された「或る宮腹の女房」もとくに罪があったとは記されていない。そして、そのよ

うな罪軽い人々は当然のことかもしれないが、まれには「殺生・放逸、惣て无限」き「造悪業人」でさえ、「弥陀ノ念仏」を「憶三千度唱」えることで、火車にかわって「金色の大蓮花一葉」を見、極楽往生を遂げている（『今昔物語集』卷第十五第四十七）。

さらに、『三縁山志』巻九には、自ら火車を招き、「忻然として」これに乗って飛び去った音普上人の事蹟を伝えている。文明十一年（一四七九）亥七月二日（『鎮流祖伝』巻第四「三縁山増上寺音普上人伝」は宝徳元年（一四四九）三月とする）、大衆を集めて堂に上った上人は、「獄火来現の法則」を問起し、訝る聴衆に「我が化縁慈に尽く、吾將に逝かんとす」と告げて、

火宅をはやもえ出む小車ののりえて見れば我あらばこそと一首詠じ、空裡を招くとたちまち火車が現じたというのである。人によつては「宝蓮に座し、天童圍繞し、雲衢に冲り、西に入る」と見えたといひ、世は挙げて「観音の化身」とたたえたともある。

これらを要するに、火車の来迎は極楽往生の過程としてもとらえることができ、すなわち「火宅の出車」たりう場合があったといえる。もとより御息所の「破れ車」は、「三つの車」としては破綻しており、それゆえ怨霊となって葵上に祟りしたのであるが、火車即墮獄の図式は絶対的なものでなく、「般若声」に導かれ、「のりえて見れば」、生霊の火宅のみならず、死霊の火車地獄までも脱したと解することもできなくはない。少なくとも火車は、悪霊成仏の絶対の障礙ではなかった。

「悪鬼心を和らげ、忍辱慈悲の姿にて、菩薩もここに来迎す」とある「菩薩」は、日本古典文学大系『謡曲集上』の指摘するように、「鬼の姿のシテ自身のこと」であろう。「観音の化身」ならぬ、羅刹女の浄化した姿が認められ、火車変じて「火宅の出車」となりえたわけである。

正妻への復讐心をたえずかきたてる屈辱の象徴であった「破れ車」は、

こうして実に多義的な火車のイメージで怨霊成仏の主題を統一するものと考えられるのである。

〔注〕

(1) 『日本庶民文化史料集成』第三巻による。

(2) ただし、『源氏物語大概真秘抄』(傍点部、『源氏大綱』ではカッコ内の語)に「葵の上くはんらくは、此(魂落)みやす所のおんりやうなり」(稲賀敬二編『中世源氏物語梗概書』〔中世文芸叢書2〕による)とあるのは、生霊の意であろう。

(3) 朱雀院—弘徽殿派が左大臣家の憂い事に骨折ることはありえない。ここは、『謡曲拾葉抄』に「桐壺帝御位おりさせ給ひて今此時は朱雀院の御代なると故にかく作る也」とあるのが正しく、左大臣家側の者であれ、すなわち朱雀帝に仕える臣下にはちがいない。

(4) 香西精「葵上」について」(『能謡新考』所収)。

(5) 「怨霊執念物の謡曲」(『池田弥三郎著作集』第三巻所収)。

(6) 野島秀勝「距離のロマネスク」(『解釈と鑑賞』42の1、一九七七年一月)。

(7) 拙稿「小町の現在—能へ小町物への視座—」(『解釈』27の1、一九八一年一月)。

(8) 前掲(4)の香西論文にも「実質的には、むしろ夢幻能の内容を持っている。というのは、この能のシテは、照日の巫女の巫術的霊覚にのみ見える幻影であって、他のノーマルな感覚には捉えられるべきものでないという点で、ワキ僧の夢に現われる幻と全く同じだからである」としている。

(9) 表章「葵上」(『観世』41の8、一九七四年八月)。

(10) 拙稿「能『三山』—『万葉集』の中世—」(『金沢大学文学

部論集』2、一九八二年三月)参照。

(11) 大朝雄二「六条御息所の苦惱」(『講座源氏物語の世界』第三集〔一九八一年二月刊〕)。

(12) 青山克弥「発心集」における『往生要集』の摂取について—成立過程に関連して—」(『説話・物語論集』4、一九七六年一月)の指摘による。なお、『経律異相』第五十にもほぼ同文を引き、また別の箇所には「玉女」ではなく「如童男像」を現じたとしている。

(13) 日本思想大系「源信」の訓みによる。

(14) 『日本絵巻物全集VI』による。

(15) 『大方便仏報恩経』巻第二、「仏説観仏三昧海経」第五、『経律異相』第五十など。また、『沙石集』巻第二、地蔵菩薩種々利益事や『太平記』巻第二十、結城入道墮地獄事にも。

(16) 日本古典文学大系『仮名法語集』による。

(17) 古典文庫『宝物集へ中世古写本三種』による。

(18) 「もののけの力」(『源氏物語の思想』〔一九五二年四月刊〕所収)。

(19) 深沢三千男「六条御息所悪霊事件の主題性について」(『源氏物語とその影響 研究と資料』〔古代文学論叢第六輯、一九七八年三月刊〕所収)。

(20) 馬場あき子『鬼の研究』(一九七一年六月刊)。

(21) 里井陸郎「謡曲百選その詩とドラマ(上)」(一九七九年五月刊)

(22) 前掲(20)論文。

(23) 『浄土宗全書』十九による。「火宅をはや」は「火宅をははや」の脱字か、あるいは「火宅」を「ひのいへ」と訓むか。なお『鎮流祖伝』は上句を「火宅仁和摩多茂耶伊天無於具留摩能」とする。

(金沢大学文学部助手)